

L13b 岡部隕石の火球経路の再考察

佐藤幹哉（日本流星研究会）、渡部潤一（国立天文台）、藤田陽実、川口雅也（アストローツ）、飯島裕、前田知絵

岡部隕石は、1958年11月26日15時過ぎに、埼玉県大里郡旧岡部村（現深谷市）に落下した全重量194gの石質隕石で、落下地点の隣で農作業中だった山ざき(*)政雄氏らが発見した。白昼の現象にも関わらず、長野県諏訪市と神奈川県川崎市の2地点で、アマチュア天文家はその火球を目撃しており、その経路が報告されている。しかしながら、これらの報告には何らかの矛盾があり、そのままでは火球の飛来方向を決定できなかった。落下当時は、このうちの1地点の方位角の報告値を反対方向に飛来したと解釈して、南から北へ飛来し落下したと結論づけられた。

一方、本年秋の落下60周年を前に、目撃者及び発見者への取材（聞き取り調査）を行ったところ、飛来方向を反対に解釈したものは誤りであることが判明した。そこで新たに火球の飛来経路を再考察することとした。その結果、およそ北西方向から飛来したとの推測値が得られた。この再考察の結果を月刊星ナビ誌（2017年5月号、P.49）にて報告したところ、群馬県伊勢崎市におけるアマチュア天文家からの目撃情報が新たに得られた。この情報を加え、経路を再度推測し直した結果、火球経路は北西ないし西北西方向から飛来したものと結論付けられた。またある程度の風によって流されたと仮定すると、各地点での目撃情報により整合した結果となることが判明した。

本発表では、これらの再考察の経緯や方法について、詳細に報告する。

(*)山ざき氏の「ざき」は「崎」の異体字で右上が「立」になるもの。